

# 秋日記

原民喜

青空文庫



緑色の衝立ついたてが病室の内部を塞ふさいでいたが、入口の壁際かべぎわにある手洗の鏡に映る姿で、妻はベッドに寝たまま、彼のやって来るのを知るのだった。一号室の扉のところまで来ると、奥にいる妻の気配や、そちらへ近づいて行こうとする微かすかに改まった気分を意識しながら、衝立をめぐって、ベッドのところへ彼がやって来ると、妻はいたずらっぽく微笑で彼を迎える。すると彼には一昨日ここを訪れた時からの隔りがたちまち消えてしまう。小さな卓花瓶かびんにコスモスの花が、紅あかい小さなボンボンダリアと一緒に挿さしてあるのが眼に留ると、彼は一昨日は見なかったダリアの花に、ささやかな変化を見出みいだすのではあったが、午後の明るい光線と澄

んだ空気は窓の外から、今もこちら側を覗のぞいている。……

ベッドの脇わきの椅子に腰をおろした彼は、かえって病人のような  
気持がするのだった。午後になると微熱が出て、眼にうつる世界  
がかすかに消耗されてゆく、そうすると、彼には外界もそれを映  
すものも冴さえて美しくなつた。彼の棲すんでいる世界はいま奇妙な  
結晶体であつた。彼はその限られた世界の中を滑すべり歩いていたし、  
そうして、妻の病室へやって来る時、その世界はいちばん透きと  
おつていた。

白いカバアの掛つた掛蒲団かけぶとんの上に、小豆色あずきいろの派手な鹿子かのこし  
絞ぼりの羽織がふわりと脱捨ててあるのが、雪の上の落葉のように  
あざやかに眼にうつるが、枕まくらに顔を沈めている妻は、その顔には

何か冴え冴えしたものがあつた。二日まえのことだが、彼はこの部屋が薄暗くなり廊下の方がざわつく頃まで、じつと妻の言葉をきいていた。そして、結局しよんぼりと廊下の外へ出て行つた。すると翌日、病院へ使いに行つた女中が妻の手紙を持って戻り彼に手渡した。小さく折畳んだ便箋びんせんに鉛筆で細かに、こまかな心づかいが満たされていた。(あなたがしよんぼりと廊下の方へ出てゆかれた後姿を見送つて、おもわず涙が浮びました。体の方は大丈夫なのでしようね、余計な心配をかけて済みませんでした、……) 努めて無表情に読過そうとしたが、彼は底の方で疼うずくようなものを感じた。

こうした手紙をもらうようになったのか——それは彼にとって

は、やはり新鮮なおどろきであつた。妻は入院の費用にあてるため、郷里に置いてある箆筒たんすを本家で買いつつてもらうことを相談した。彼がさびしく同意すると、妻は寝たまま、一ひと頻しきり彼の無能を云うのであつた。十年前嫁入道具の一つとして郷里の土蔵に持込まれたまま、一度も使用されず、その箆筒がひと手に渡るのは彼にとつても身を削そがれるような氣持だつた。だが、身の落目をとりかえすため奮然として鬪たたかうてだてが今あるのだろうか。彼は妻の言葉を聞きながら、薄暗くなつてゆく窓の外をぼんやり眺ながめていた。おぼろな空のむこうに、遙はるかな暗い海のはてに、火を吐いて沈んでゆく臃腫もうどうや、熱い砂地に晒さらされている白骨の姿が、——それは、はつきりした映像としてではなく、何か凍こてつ

いた暗雲のようにいつも心を翳<sup>かげ</sup>らせている。それから、何気ない日々のくらしも、彼の周囲はまだ穏かではあったが、見えない大きい力によつて、刻々に壊<sup>こわ</sup>されているのではないか。どうにもならない転落の中間に、ぽつんと放り出された二人ではないか。そうおもいながら、あるとき彼は妻にかえす言葉を喪<sup>うしな</sup>つていたのだが……。書斎の椅子にぐつたりとして、彼は女中が持つて帰つた妻の手紙を、その小さな紙片をもとどおりに折畳んだ。悲壯がはじまっていた。そしてそれは、ひっそりとしていたのであった。

その年の秋も、いらだたしい光線のなかに雨雲が引裂かれていた。そうした、ある落着かない気分の夕刻近く、彼は妻に附添つてその大きな病院の門をくぐつた。二階の廊下をいく曲りして静

かな廊下に出たところに一号室があつた。その部屋の窓からは、遙かに稲田や人家が展望された。前にいた人が残して行つたらしい大きな古びた財布さいふが片隅かたすみにあつた。一わたり部屋を見まわすと、すぐに妻はベッドに臥ふさつた。はじめて落着く場所にかえつたような安らかさと、これから始ろうとする試煉しれんにうち克かとうとする初々ういういしさが、瘦やせた妻の身振りのなかにぱつと呼吸いきづいていた。だが、彼はひとり置去りにされたように、とぼとぼと日が暮れて家に戻つて来たのだつた。

この時から、二つにたち割られた場所のなかで、彼の逍遙しやうようがはじまつた。隔日に学校へ通勤している彼は、休みの日を午後から病院へ出掛けて行くのだつたが、どうかすると、学校の帰り



をそのまま立寄ることもあった。巷ちまたで運よく見つけた電熱器を病室の片隅につけると、それで紅茶も沸かせた。ベッド脇に据えつけられている小さな戸棚とだなには、林檎りんごやバタがあつた。いつのまにか、そこは居心地いごちのいい場所になつていたので。

いく日も雨が降りつづいた。粗末な学校の廊下も窓もびつしりと湿り、稀まれにしかやつて来ない電車は、これも雨に痛めつけられていたし、電車の窓の外に見える野づらや海も茫ぼうとして色彩を失つていた。だが、高台の上に立つ、大きな病院の建物は、牢固ろうこな壁や整つた窓が下界の雨をすつかり遮さえぎつていた。

「あなたが学校まで歩いてゆく路みちと、家からこの病院まで来る道とどちらが遠いの」と妻はたずねた。「同じ位だね」と彼がこた

えると「まあ、そんなに遠い路をこれまで歩いていたのでですか」と妻は彼がこの二年間通っていた路の長さがはじめて分つたような顔つきであった。その路の話なら、これまで寝ている妻に何度も語っていたし、彼にとつてはもう慣れていて左程苦痛ではなかつた。妻はもつといろんなことを訊<sup>たず</sup>ねたいような顔つきで、留守にした家のこまごました事柄が絶えず眼さきにちらついているようであつた。だが、彼はそうした妻の顔を眺めながら、つきつめた想いで、何かはてしないものを考えていた。いつも二人は相對したまま、相手のなかに把<sup>とら</sup>えどころのない解答を求めあつていたのであつた。そうして時間はすぐに過ぎて行つた。夕ぐれが近づいて、立去る時刻が迫ると、彼は静かなざわめきに急<sup>せ</sup>ぎ立てられ

るような気がした。窓の外に雨はまだ絶望的に降りつづっていた。「バスでお帰りなさい、バスの時間表がここにあるから、もう少し待っていていればいいでしょう」と妻は雨に濡れて行こうとする彼をひき留めた。

停車場とその病院の間を往来するバスが、病院の玄関に横づけにされた。すると、折おり鞆かばんを抱かかえた若い医師が二人、彼の座席のすぐ側そばに乗込んで腰を下ろした。雨はバスの屋根を洗うように流れ、窓の隙間すきまからしづきが吹込んだ。「よく降りますね、今年

は雨の豊年でしょうか」と医師たちは身を縮めて話し合っていた。やがて、バスは揺れて、真暗な坂路を走って行った。

銀行の角でバスを降りると、彼はずぶ濡れの舗道ほどうを電車駅の方

へ歩いた。雨に痛めつけられた人々がホームにぼんやり立並んでいた。次の停留場で電車を降りると、袋路の方は真暗であつた。彼はその真暗な奥の方へとつとと歩いて行つた。

さきほどから、何か真暗な長いもののなかを潜り抜けて行くよ  
うな気持が引続いていた。よく降りますね、今年は雨の豊年でし  
ようか、——そういう言葉がふと非力な人間の眩つふやきとして甦よみがえつて  
来るのであつた。そういうえばバスや電車の席にぐつたりと凭より掛かか  
つている人間の姿も、何か空漠くうぼくとしたものに身を委ゆだねているよ  
うである。日々のいとなみや、動作まですべて、眼には見えない  
一本の糸によつてあやつられているのであろうか。彼は書齋のス  
タンドを捻ひねり、椅子に凭掛ひねつたまま、屋根の上を流れる雨の音を

きいていた。病室の妻や、病院の姿が、真暗な雨のなかに点る懐ともなつかしい小さな灯のようにおもえた。

ながい間、書齋の壁に貼はりつけていた火口湖の写真が、いつ、どこへ仕舞込んでしまったものか、もう見あたらなかつた。が彼はよく、その火口湖の姿をおもい浮べながら、過ぎ去つた日のことを考えた。それは彼が妻とはじめてその湖水のほつりを訪れた時、何気なく購かい求めた写真であつた。毎朝その写真の湖水のところ、窓から射さし込む柔かな陽光が纏もつれ、それをぼんやり甘えた気持で眺める彼であつた。……彼は山の中ほどで、息が切なくなつていた。すると妻が彼の肩を軽く叩たたいてくれた。それから、

ふと思いがけぬところに、バスの乗場があり、バスは滑らかに山霧のなかを走った。——それはまだ昨日の出来事のように鮮かであつた。だが、二度目にひとりで、その同じ場所を訪れた時の記憶もヒリヒリと眼のまえに彷徨つていた。みじめな、孤独な、心ころほう  
呆 けした旅であつた。優しいはずの湖水の眺めが、まっ暗な幻影で覆われていた。殆ど自殺未遂者のような顔つきで、彼はそのひとり旅から戻つて来た。すると、間もなく彼の妻が咯血したのだつた。四年前の秋のことであつた。妻の病気によつて、あ  
のとき、彼は自らの命を繋ぎとめたのかもしれない。

久し振りに爽やかな光線が庭さきにちらついていたが、彼は重

苦しい予想で、ぐったりとしていた。再検査の紙が彼のところにも送附されて来たのだった。それは、ただ医師の診断を受けて、書込んでもらえばよかつたのだが、そういうものが舞込んで来ることに、彼は容易ならぬものを感じた。彼は昨日も訪れたばかりの妻のところへ、また出掛けて行きたくなつた。

街は日の光でひどく眩まぶしかつた。それは忽たちまち喘あえぐように彼を疲らせてしまつた。だが、病院の玄関に辿たどり着くと、朝の廊下は水のように澄んでいた。ひっそりとした扉をあけて、彼が病室の方へ這入はいつて行くと、妻は思いがけない時刻にやって来た彼の姿を珍めづしげに眺め、ひどく嬉うれしそうにするのであつた。その紙片を見せると、妻はしばらく黙つて考えていた。

「診察なら、津軽先生にしてもらえばいいでしょう」と、妻はすぐにまた晴れやかな調子にかえった。

「お天氣がいいので訪ねて来てくれたのかと思つたら、そんなこととの相談でしたの」と妻は軽く諧かいぎやく諷ぶんをまじえだした。「御飯を食べてお帰りなさい、久し振りに旦那さんと一緒に御飯なりと頂きましようよ」

妻は努めて、そして無造作に、いま重苦しい考を追払おうとしていた。……赤いジャケツを着た、はち切れそうな娘が、運搬車を押して昼食を持って来た。糖尿試験食の皿と普通の皿と、ベツド・テーブルの上に並べられると、御馳走ごちそうのある試験食の方の皿から、普通食の皿へ、妻は箸はしでとって彼に頒わかつのだった。



翌日、約束の時間に出掛けて行くと、妻のところ立寄った津軽先生は、軽く彼に会釈して、廊下の外へ彼を伴なつて行つた。医局の前を通りすぎて、広い部屋に入ると、彼は上衣うわぎのボタンをはずした。妻のひどく信頼している津軽先生は、指さきから、ものごしにいたるまで、静かにととのつた気品があつた。一度は軍医として出征したこともあるのだが、荒々しいものの、まるで感じられない人柄であつた。その、いつも妻の体を調べている指さきが、いま彼の背を綿密に打診していた。すると、かすかに甘えたいような魔術が読みとられた。津軽先生はペンを執つて、再検査の用紙の胸部疾患の欄に二三行書込んで行つた。「脚氣かっけの気味

もあるようですね」と先生は呟いた。

診察がすむと、彼はぐったりして、廊下の方へ出て行つたが、眼のまえの空間が茫と疼く疲労感で一杯になつていた。それから、妻の病室へ戻つて来ると、パツと何か渦巻く色彩があつた。いま妻のベッドの脇わきには、近所の細君が二人づれで見舞に来ていた。テーブルの上に菊の花が乱れた儘ままになつていた。いつもくすんだ身なりをしている隣組の女たちの、こうした、たまの盛装が、この部屋の空気を落着かなくしているのだろうか。……「ひどい南風ですね」と細君のひとりは窓の方を眺めながら云つた。そういえば、リノリウムの廊下まで、べとべとと湿氣ていたし、ガラス窓の外は茫と白くふくれ上つて揺れかえしているのであつた。見

舞客が帰って行くと、妻はぐったりした顔つきで、枕に頭を沈めた。その頬ほおはかすかに火照っているようであつた。

その南風が吹き募ると、海と空が茫ふくと脹ふくらんで白く燃え上るようであつた。どうかすると真夏よりも酷きびしい光線で野の緑が射とめられていた。落着のないクラスの生徒たちは、この風が吹きまくるとき、ことに騒々しかつた。彼はときどき教壇の方から眼を運動場のはてにある遠い緑の塊かたまりに対むけていた。舞上る砂すなほこり埃埃に遮られて、それは森とも丘とも見わけのつかぬ茫漠とした眺めではあつたが、あの混濁のなかに一つの清澄が棲すんでいて、それが頻しきりに向うから彼の魂を誘っているようだつた。すぐ表の坂を轟ごうごう々と戦車が通りすぎて行つた。すると、かぼそい彼の声は騒

音と生徒の喚わめきで、すつかり振もぎとられてしまうのであった。

その風が鎮しずまると、漸ようやく秋らしい青空が眺められた。澄んだ午後の光線は電車の中にも流れ込んでいた。瘦やせ細った老人が萎しなびたコスモスの花を持って、恐しい顔つきのまま座席うずくまに蹲うずくまっている。ある小駅につづく露次では、うず高く積み重ねられた芋俵をめぐって、人が蟻ありのように動いていた。よじくれた榎えのきくさむらと叢むらのはてに、浅い海が白く光っていた。そうした眺めは、彼にとつてはもう久しく見馴みなれている風景ではあったが、なぜか近頃、はつきりと輪郭をもつて、小さな絵のように彼の眼の前にとまった。その絵を妻に頒ち与えたいような気持で、病院の方へ足を運んでいることがあった。

胸の奥に軽く生暖かい疼きを感じながら、彼は繊細なものの翳<sup>かげ</sup>や、甘美な聯想<sup>れんそう</sup>にとり縋<sup>すが</sup>るように、歩き廻っていた。家と病院と学校と、その三つの間を往<sup>い</sup>つたり来たりする靴が、溝<sup>みぞ</sup>に添う曲り角を歩いていった。そこから坂道を登って行けば病院だったが、その辺を歩いている時、ふと彼の時間は冷やかな秋の光で結晶し、永遠によつて貫かれているような気がした。それから、病院の長い長い廊下や、（それは夢のなかの廊下ではなかったが）大概、彼が行くときか帰りにきつと出逢<sup>であ</sup>う中風患者の姿、（冷たい雨の日も浴衣<sup>ゆかた</sup>がけで何やら大袈裟<sup>おおげさ</sup>な身振りで、可憐<sup>かれん</sup>に片手を震わせていた）合同病室の扉の方から喰<sup>は</sup>み出している痩せた女の黄色い顔、一つの角を曲ると忽ち轟<sup>ごうぜん</sup>然とひびいて来る庖厨部<sup>ぼうちゆうぶ</sup>の皿の

音、——そうした病院の風景を家に帰って振返つてみると、彼には半分夢のなかの印象か、ひそかに愛読している書物のなかにある情景のようにおもえた。

だが、彼の妻が白い寝巻の上にパツと派手な羽織をひっかけ、「その辺まで見送つてあげましょう」と、外の廊下の曲り角まで一緒について来て、「ここでおわかれ」と云つた時、彼はかすかに後髪を牽ひかれるようなおもいがした。そこには、妻の振舞のあざやかさがひとり取残されていた。

ひとりで、附添も置かず、その部屋で暮ひらめしている妻は、彼が訪れて行つたたびに、何かパツと新鮮な閃ひらめきをつたえた。

「熱はもうすっかり退さりました。津軽先生が、この薬とてもよく効きくとおっしゃるの」そう云つて黒い小粒の薬を彼に見せながら、「そのうち気胸ききょうもしてみようかとおっしゃるの、でも、糖尿の方があるので……」と、妻は仔細しさいそうな顔をする。「先生も尿の検査にはなかなか骨が折れるとおっしゃるの」

彼は妻の口振りから津軽先生の動作まで目に浮ぶようであつた。……明るい窓辺まじべで、静かにグラスの目盛を測っている津軽先生は、時々ペンを執つて、何か紙片に書込んでいる。それは毎日、同じ時刻に同じ姿勢で確実に続けられて行く。と、ある日、どうしたことかグラスの尿はすべて青空に蒸発し、先生の眼前には露に揺らぐコスモスの花ばかりがある。先生はうれしげに笑う。妻はす

すっかり恢復かいふくしているのだった。

「わかつたの、わかつたのよ」

妻は彼が部屋に這入って行くと、待兼ねていたように口をきつた。

「もうこれからは、独りひとで病氣の加減を知ることが出来そうよ、どうすればいいかわかつて」そう云つて妻は大きな眼をみはつた。「尿を舐なめてみたの、すると、とてもあまかつた。糖がすっかり出てしまうのね」

妻はさびしげに笑つた。だが、笑う妻の顔には悲痛がピンと漲みなぎつていた。この病院でも医者はずきづきに召集されていたし、津軽先生もいつまでも妻をみてくれるとは請合えなかつた。三カ月



の予定で糖尿の療法を身につけるため入院した妻は、毎日三度の試験食を丹念に手帳に書きとめているのだった。

ある午後、彼の眼の前には、透きとおった、美しい、少し冷やかな空気が真二つにはり裂け、その底にずしんと坐っている妻の顔があつた。

「この頃は、毎朝、お祈りをしているの、もう祈るよりほかないでしょう、つまらないこと考えないで一生懸命お祈りするの」

そう云つて妻はいまもベッドの上に坐り直り、祈るような必死の顔つきであつた。すると、白い壁や天井がかすかに眩暈げんうんを放ちだす、あの熱っぽいものが、彼のうちにも疼うずきだした。彼はそ

つと椅子を立上つて窓の外に出る扉を押した。そのベランダへ出ると、明るい瀨こうき気がじかに押しよせて来るようだった。すぐ近くに見おろせる精神科の棟むねや、石炭貯蔵所から、裏門の垣かきをへだてて、その向うは広漠こうぼくとした田野であつた。人家や径みちが色づいた野づらを匂はつていたが、遮さえぎるものもない空は大きな弧を描いて目の前に垂たれさがつていた。

.....

「こんどおいでのとき聖書を持って来て下さい」

妻はうち砕かれた花のような笑えみを浮べていた。……家へ戻つてから、ふと古びた小型のバイブルをとり出して見て、彼はハツとするのだった。それは彼が少年の頃、亡なくなった姉から形見に

貰<sup>もら</sup>ったものであった。二十年も前のことだが、死ぬ前、姉は県病院に入院していた。二度ばかり見舞に行つて、それきり姉とは逢えなかつたのだが、この姉の追憶はいつも彼を甘美な少年の魂に還<sup>かえ</sup>らせていた。そういえば、彼が妻の顔をぼんやり眺<sup>なが</sup>めながら、この頃何かしきりに考えていたのはそのことだつたのだろうか。静かな病室のなかで、うつとりと、ふと何か口をついて、喋<sup>しゃべ</sup>りたくなりながら、口には出なかつたのは、そのことだつたのだろうか。

真昼の電車の窓から海岸の叢<sup>くさむら</sup>に白く光る薄<sup>すすき</sup>の穂が見えた。砂丘が杜<sup>とぎ</sup>切れて、窪<sup>くぼち</sup>地になつているところに投げ出されている叢だつ

たが、春さきにはうらうらと陽炎かげろうが燃え、雲雀ひばりの声がきこえた。その小景にこころ惹かれ、妻に話したのも、ついこのあいだのようだったが、そのところが今、白い穂で揺れていた。薄は気がつくど、しかし沿線のいたるところにあつた。電車の後方の窓から見ると、遙はるかにどこまでも遠ざかつてゆく線路のまわりにチラチラと白いものが閃ひらめいた。ある朝、学校へ出掛けて行く彼は、電車の窓に迫つて来る崖がけの上に、さわさわと露に揺れる丈たけ高い草を刈り取っている女の姿を見た。崖下の叢もうつすらと色づいていた。それから間もなく、田のあちこちが黒いおもてを現して来た。刈あとの切株のほとりに、ふと大きな牛の胴を見ることもあつた。時雨しぐれに濡ぬれて、ある駅から乗込んだ画家は、すぐまた次の駅で降

りて行つた。そうした情景を彼もまた画家のような気持で眺めるのだつた。

それから、ある午後、彼が教室で授業していると、ふと窓の外の方があやしく気にかかった。リーダーを持ったまま、彼は硝ガラス子窓まどの方へ注意を対むけていた。ひよろひよろの銀杏いちようこずえの梢こずえに黄金色の葉がヒラヒラしているのだ。あ、あれだろうか、……何とも名ざし出来ない、美しい透明な世界がすぐそこにあるようだし、それはひっそりとおりすぎてゆくのであつた。

彼はそつと窓の方の扉をあけて、いつものベランダに出てみた。冷たい空気が頬にあたり、すぐ真下に見える鈴懸すずかけの並木がはつ

と色づいていた。と、何かヒラヒラするものがうごき、無数の落葉が眼の奥で渦巻いた。いま建物の蔭かげから、見習看護婦の群が現れると、つぎつぎに裏門の方へ消えて行くのだった。その宿舎へ帰って行くらしい少女たちの賑にぎやかな足並は、次第にやさしい祈りを含んでいるようにおもえた。と、この大きな病院全体が、ふと彼には寺院の幻想となっていた。高台の上に建つこの大伽藍だいがらんは、はてしない天にむかつて、じつと祈りを捧ささげているのではないか。明るい空気のなかに、かすかな靄もやが顫ふるえながら立たち罩こめてくるようだった。やがて彼は病室へ戻つて来た。すると、妻は今まで閉じていた眼をパツと見ひらいた。「行つてみる時刻でしよう」と妻は愁うれわしげに云う。その日、津軽先生から話があるとい

うので、外来患者控室の前で逢うことになっていた。

彼は廊下の椅子に腰を下ろして待った。約束の時刻は来ていたが先生の姿は見えなかった。すぐ目の前を、医者や看護婦や医学生たちが、いく人もいく人も通りすぎて行った。やがて廊下はひっそりとして、冷え冷えして来た。めっきり暗くなった廊下で彼はいつまでも待った。よくない予感がしきりにしていたが、そうして待たされているうちに、もう彼は何も考えようとはしなかった。ただ、この世の一切から見離されて、極地のはてに、置きざりにされたような、暗い、冷たい、突き刺すような感覚があった。「遅くなりました」ふと目の前に津軽先生の姿が現れた。

「召集がかかりましたので」先生は笑いながら穏やかな顔つきで

あつた。急に彼は眼の前が真暗になり、置きざりにされている感覚がまたパツと大きく口を開いた。誰か女のつれが向うの廊下からちらとこちらを覗いたのぞようであつた。

「インシュリンのことでしたね、あの薬はあなたの方では手はに這はいりませんか」

「まるで、あてがないのです」

彼は歪ゆがんだ声で悲しそうにこたへた。その大きな病院でも今は容易にそれが得られなかつたが、その注射薬がなければ、妻の病は到底助からないのであつた。

「そうですね、それでは僕が出て行つたあとも、引きつづいて、ここへ取寄せるように手筈てはずしておきましょう」



そういつて先生はもう立去りそんな気配であつた。彼はとり纏つて、何かもつと訊ねたいことや、訴えたいものを感じながらも、押黙つていた。

「それでは失礼します、お大切に」先生は軽く頷きながら静かな足どりで立去つてしまつた。

日が短くなつていた。病院を出て家に戻つて来るまでに、あたりは見る見るうちに薄暗くなつてゆき、それが落魄らくはくのおもいをそそのるでもあつた。薄暗い病院の廊下から表玄関へ出ると、パツと向うの空は明るかつた。だが、その坂を下つて、橋のところまで行くうちに、靄につつまれた街は刻々にうつろつて行く。

どこの店でも早くから戸を鎖とぎし、人々は黙々と家路に急いでいた。たまに灯をつけた書店があると、彼は立寄つて書棚しよだなを眺めた。彼ははじめて、この街を訪れた漂泊者のような気持で、ひとりゆつくりと歩いてきた。そうしているうちにも、何か急せきたてるようなものがあたりにあつた。日が暮れて路を見失つた旅人の話、むかし彼が子供の頃よくきかされたお伽とぎばなし 噺ばなしに出でくる夕暮、日没とともに忍びよる魔ものの姿、そうした、さまざまの脅おびえ心地ごこちが、どこか遠くからじつと、この巷ちまたにも紛れ込んでくるのではあるまいか。

……弥生やよひも末なぬかの七日なぬか明あけほの、空朧ろうろう々として月はありあけ在明ありあけにて光あかりをさまれる物から不二ふじの峯幽かすかにみえて上野谷うへのやなか中の花こずゑの梢こずゑ又いつ

かはと心ほそしむつましきかきりは宵よりつとひて舟に乗て送  
 る千しゆと云<sup>いふところ</sup>所にて船をあかれは前途三千里のおもひ胸に  
 ふさかりて幻のちまたに離別の泪<sup>なみだ</sup>をそゝく

彼は歩きながら『奥の細道』の一節を暗<sup>あんしやう</sup>誦<sup>じゆ</sup>していた。これ  
 は妻のかたわらで暗誦してきかせたこともあるのだが、弱い己<sup>おの</sup>れ  
 の心を支え<sup>ささ</sup>ようとする祈りでもあつた。

……幻のちまたに離別の泪をそゝく  
 今も目の前を電車駅に通じる小路へ、人はぞろぞろと続いて行  
 った。

(昭和二十二年四月号『四季』)



# 青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

入力…tatsuki

校正：林 幸雄

2002年1月1日公開

2005年12月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 秋日記

原民喜

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>